

# カエルがゆく この人に 会いたい

## 地域日本語教育の現場から

地域日本語教育の現場には、多文化共生の最前線で活躍するアツい人たちがたくさんいます。異文化がぶつかり合う中で、もみくちゃになりながらそれを楽しみ、人と人をつなぎ付け、地域社会を担う柱となる——。そんな魅力的な人と、その人が関わる事業について、好奇心旺盛なカエルが話を聞きに出掛けました。

取材・文=編集部 イラスト=野村俊夫



第9回

### 今回の「この人」

## 北村祐人さん

名古屋大学とよた日本語学習支援システムシステム・コーディネーター



座右の銘は  
「愚者は経験を語り  
賢者は歴史を語る」

### 北村さんは、いつから地域の日本語教育に関わってるの？

大学生のときからです。名古屋にある大学で、日本文学を専攻していたんですが、日本語教育にも興味があって、授業を取っていました。それで、留学生のチューターをやってみようかな、と思って。3年のとき、大学の留学生寮に住み込んで、みんなのお世話をしていました。それで、地域の日本語教室にも顔を出すようになったんですが、当時は行ったり行かなかったり、という状態でした。

本格的に地域の教室に関わりだしたのは、社会人になってからです。地元で一般の企業に就職したのですが、就職先と

教室が近くなったこともあり、学生時代よりも、頻繁に通うようになったんです。これが楽しくて仕方ありませんでした。教室がある土曜日が来るのが待ち遠しくて(笑)。

### どんなことがそんなに楽しかったの？

一番は、感謝される満足感ですね。ボランティアに行くと、それだけで感謝される。学習者からもらう「こういうことができるようになったよ」などのコメントも、すごく励みになりました。

それから、担当していた中国人男性が、地元のスピーチコンテストに出て、「北村さんの教え方がとても上手で、教えてくれてありがたい。本当に感謝している」という内容で発表してくれたんです。

### それはぐっとくるね。

本当にうれしかったです。自分としては、まだまだ自信がなかったし、力不足を感じていたのですが。

### でも、いい仕事にも就けてプライベートも充実して、とてもいいね。

実は、仕事のほうはそうでもなくて……。いろいろ考えて、しばらくして退職し、次の道を歩むことを選びました。

### そうなんだー。誰もがうらやむような企業なのに、もったいないね。

うーん。でも、当時の上司もいい人で、納得して辞められたので、後悔はしていません。退職後、「これからどうしようかな」って考えたときに浮かんできたのが、地域の日本語教室のことでした。

地域の教室に来る学習者は、ある程度は話せる人でも、固定化した話題を出し入れしているだけで、コミュニケーションに広がる会話ができていない、という印象があり、気になっていました。なので、どうやったら、彼らももっとコミュニケーション力を身に付けて、より豊かなやりとりができるようになるのか、そのためのコースデザインは何なのかを研究したくて、大学院に行くことを決めました。

でも、それで論文を書くには無理があるとわかりました。地域の日本語教育は、固定化されたコースデザインには、収まらないんだ、と。結局、僕が名古屋大学の大学院に入った年に、そこでちょうど始められていた「とよた日本語学習支援システム」の日本語教室に調査に入らせてもらって、「教室でのやりとりが、外国人の日本語習得にどういう影響を及ぼしているのか」について研究しました。よく、「日本人ボランティアと学習者がおしゃべりをしているだけで、日本語の力が付くのか」と言われますよね。それがどうなのか、確かめたいと思ったんです。

### それで、その結論は？

音声を録音して、文字起こしをして、日本人と外国人がどういう談話を繰り返しているかを分析したんですけど、発話量が抜群に増える、ということと、最初は日本人から話し掛ける形が多かったのが、徐々に学習者側からの切り出しが増えていく、ということがわかりました。

### カエルがまとめた外国人と日本語教育を取り巻くざっくり年表

- 1972 ●中国残留邦人帰国開始
- 83年には、中国帰国者定着促進センターが開設され、日本語教育が行われた
- 1977 ●(社)日本語教育学会設立
- 1980 ●インドシナ難民の受け入れ開始
- 東京・神奈川・兵庫に定着促進センターがつくられ、日本語教育が行われた
- 1980 ●「ジャバゆきさん」社会現象
- 年代 農村花嫁がやってくるようになる
- 1983 ●留学生10万人計画
- 中曽根内閣の時、国策として策定され、2003年に達成された
- 1984 ●日本語能力試験開始
- 1988 ●上海事件
- 日本の日本語学校に留学を希望した学生が、授業料を払ったにもかかわらず、ビザが発給されなかったため、在上海日本領事館に抗議行動が起こされた
- 1989 ●日本語教育能力検定試験開始
- 1990 ●改正入管法の施行
- この改正により「定住者」ビザが創設され、事実上、日系人などが日本で単純労働することを合法化した。これにより、デカセギとして多くの外国人が来日し、その後の定住化につながっていく
- 1990 ●日本語教育振興協会設立
- 88年の上海事件を受け、日本語学校の適正を審査する機関として設立された
- 2001 ●第1回外国人集住都市会議開催
- 2002 ●日本留学試験開始
- 2005 ●外国人登録者数200万人突破
- 2006 ●総務省「多文化共生推進プラン」策定
- 2007 ●経団連「外国人材受入問題に関する第二次提言」発表
- 2008 ●留学生30万人計画
- EPA(経済連携協定)で1回目の看護師・介護福祉士候補生が来日

### へー。成果が出ているね。

僕は、日本語は、人とつながるためのツールだと思っています。「とよた日本語学習支援システム」を通じて、人と人をつなぐ仕事をさせていただいている充実感と、やりがいを感じています。このような環境を与えてくれた周囲の方々に感謝しながら、これからも社会貢献できる仕事を続けていきたいと思っています。

北村さんが関わる

## とよた日本語学習支援システム

### 外国人と日本人の間の壁を取り除く教室

トヨタ自動車株式会社のお藤元である、愛知県豊田市。2007年に、トヨタ自動車(株)が、地域貢献として豊田市に3億円を寄付。市の要請で、その三分の一が外国



図1(左)漢字は総ルビ。説明・指示の全てに翻訳が入っている。このシートを元に、辞書を片手に、外国人と日本人が、お互いのことを語る。

図2(右)「読み」練習のためのシート。ひらがな、漢字交じり、手書き文字、どの文字でも読めるように、3段になっている。

#### テーマ例

- 自分の住まいや職場の絵や写真を見せながら紹介する
- 経歴を話す ●休みの日に何をするかを話す
- 自分のお気に入りのものを説明する
- 自分の家族・友人・同僚の写真を見せながら紹介する
- 自分の趣味について話す
- 夢について話す ●自分の出身地を紹介する
- 交通機関の利用法について話す
- 旅行の思い出を絵や写真で紹介する
- 健康のために気をつけていることを話す
- 食べもの・食事について話す
- 病気・病院の情報を交換する

豊田市が、名古屋大学、豊田市国際交流協会、地域、企業の協力の下に行う取り組み。名古屋大学留学生センターが、同市の委託を受け、ガイドラインの作成、教材開発、コーディネーターなどの人材育成を行うとともに、企業内・地域の日本語教室の立ち上げと運用などを支援する。詳細は、ホームページ参照。

<http://www.toyota-j.com/>

人の日本語学習支援に使われることになった。この1億円を元に、「豊田市国際化推進基金」が設置され、企業・行政・大学・地域住民が連携し、「とよた日本語学習支援システム」がつくられた。

「普通、地域の教室の目標として、学習者の日本語能力を上げることがありますが、システムの教室の目標はちょっと違うんです」と話すのは、創設当初からこのシステムに関わる、得永美穂さん。学習者と、「日本語パートナー」として参加する日本人ボランティアを調整し、実際の現場と教室運営に関わる「プログラム・コーディネーター」の一人だ。「システムの教室の目標は、外国人と地域をつなげることなんです」

システムが運営支援する日本語教室には、地域の中の教室と企業の中の教室の2種類があるが、その言葉どおり、どちらも、外国人が生活する場・働く場の日本人が、日本語パートナーになる。地域の教室に来る日本人は、同じ地域に住む住民で、企業の教室に参加するのは、同じ会社で働く日本人従業員だ。

北村さんは語る。「多くの外国人は、日本人や日本社会とはほとんど交わらず、壁のある状態なので、お互いの理解が進まない。この壁を壊すためには、同じ地域の住民同士、同じ会社の従業員同士で、



豊田市の粕谷浩二課長(左)と、プログラム・コーディネーターの得永美穂さん(中)。豊田市国際交流協会。

お互いの関係性を築くことが第一なんです」

システムの教室には、「会話クラス」と「読み書きクラス」があり、それぞれ、1つの期が、全10回で行われる。

双方のクラスで使われるのは、「図1」のようなシート。毎回、お互いの理解が進むようなテーマが設けられており、1回につき1つのテーマについて話し合う。1期の間にどのようなテーマを取り上げるかは、学習者と話し合って決められる(これまでに取り上げられたテーマについては、p.52「テーマ例」参照)。

読み書きクラスでは、「図1」のシートに加え、「図2」のようなシートも使われる。これは、「経歴」というテーマで使われたものだ。

「この日本語教室に来て、いちばんよかったことは、日本人の友達ができただけです」と、顔を輝かせるのは、松田エリザベツさん。20年前に来日したものの、これまで日本語を学ぶ機会はありませんでした。現在、地域の読み書きクラスに通っている。「このクラスでは、最後に、みんなが書いたものを壁に張って発表します。他の人が書いたことがわかるから楽しい。それに、私が知らない言葉が出てくるので、いつもメモしています」

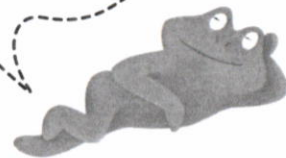
得永さんは言う。「日本語パートナーから、『全く話せない人には、そのテーマで使いそうな語彙表を用意したり、教材を使ったりしたほうがいいのではないか』という意見が出る場合があります。でも、こちらで用意したものは、しょせん学習者自身のものではありません。辞書や写

真も使いますし、何もないところからお互いに手探りで相手を知ろうと努力することこそが、相互理解への近道なんです」

行政の立場からこのシステムに関わる、豊田市総合企画部国際課の、粕谷浩二課長は言う。「このシステムは、公教育、あるいは言語政策の一環であるという性格も持ちます。他の地域や国の取り組みにも、このノウハウが生かせるよう、情報提供をしたいと思っています」

2010年度からの、システムの本格運用開始に伴い、11年度で、「豊田市国際化推進基金」はいったん完結。12年度からの運用資金の中心は、豊田市が担うことになる。同市の取り組みが「公教育」としてどのように確立されていくのか、注目したい。

システムは、  
独自に日本語能力の判定も  
行っているんだって。



さんか

豊田市で活動していると思うのが、外国人・日本人の壁を打ち砕くような社会づくりのために、一人ひとりが、もっと地域社会に関心をもってくれたらいいな、ということです。その選択肢として、地域の日本語教室に足を運んでくれたらうれしいです。



## 記事情報

誌名：『月刊日本語』 2012年1月号

発行元：株式会社アルク

発行日：2012年1月1日

\*この記事は、(株)アルクの許諾を得て該当部分のみ転載しています。  
その他の頁をご覧になりたい方は下記より冊子をお求めください。

(株)アルク オンラインショップ：

<http://shop.alc.co.jp/spg/v/-/-/0612011>